ツォンカパによる了義，未了義の設定

四　津　谷　孝　道

信仰であれ学問であれ仏教というものを心の糧とする者にとって最も肝要とされることは，仏陀の真意を切に尋ね求めることであろう。そして，そのような所作の一つとして，過去の諸の仏教者の中にその仏陀の真意を尋ね，又自らの思いを託していくことがあると思われる。ツォンカパ Tsong kha pa (1357–1419) の通称『善説心髄』*Legs bshad snying po* という書は，正にそのような所作の表われの一つなのである。

同書の内容としては，前半に於て『解深密経』を依拠とする無著兄弟等の瑜伽行派による経典解釈が，その後半に於ては『無尽慧経』を依拠とする龍樹父子等の中観派のそれが述べられているのである。本稿に於ては，この『善説心髄』に述べられている瑜伽行派並びに中観派による三転法輪解釈の相違を通してツォンカパの未了義と了義の設定を概観してみたいと思う。

ツォンカパは，特に "neyârtha" に対応する西蔵語の "drang don" のうちの "drang" を "gzhan du drang……" (LN. pha, 43b1, 3 etc.....) と換言しているのである。ここでは，この "gzhan du" という表現を梵語で云う "anyathā" の意味ではなく "anyatra" の意味と考えて，この gzhan du drang……" という表現を「他の処へ導かれる云々」と訳意を与えることにする。

そこに於て導かれるのは経典の表面的な意味であるが，ツォンカパはこの「他の処へ導かれる」ことに二つの様相があると捉えているのである。その第一は，言葉のままにさえ理解できない種の未了義の教説である。たとえば，「父と母が殺されるべきであり」(LN, pha, 43b1) という表現のうち「父と母」という箇所は，「業の有と渇愛」(LN, pha, 43b2) に導かれるべきであり，即ち換言されるべきものなのである。その第二は，言葉のままに理解することは許されるものの，それ自体としては未だ了義性を有していない種の未了義の教説である。たとえば，「白業と黒業より楽果と苦果が生じる」(LN, pha, 43b2) という表現は，言葉のままに捉えることはできるが，そこには真意（了義）が未だに表わされていないことより，やはり他の処，即ち了義に導かれるべきものなのである (LN. pha, 43b1–3)。

では，そのような教説の未了義性は云何なる側面から指摘されているのであろ

うか。それは，「真意」(dgongs pa) と同義と考えられる「本意」(dgongs gzhi, LN. pha, 39a4, 100a2)，その未了義の教説を説く目的 (dgos pa, LN. pha, 39a5, 100a2)，そしてその教説の表面的な意味を否定するもの，即ち「言葉のままを損うもの」(sgra ji bzhin pa la gnod byed, LN. pha, 39a6, 40b1, 100a3, 10b5) という三つの側面から指摘されているのである。

未了義と了義の峻別の対象となるのは，大まかに言えば，三転法輪という形で分類された諸の経典である。瑜伽行派は『解深密経』に於けるこの三転法輪の記述内容を依拠として教説の未了義性と了義性を指摘するのである。その『解深密経の当該箇所 (SN. p. 85, 1. 9-1. 33, Taishō, vol. 16. p. 697, a23-b9) の内容は次のようにまとめることができる。

	所化の人	教説の主な内容	未了義か了義か
第一転法輪	声聞乗に趣こうとする人	四　　諦	未了義
第二転法輪	大乗に趣こうとする人	無自性，不生，不滅 本来寂静，自性涅槃	未了義
第三転法輪	一切乗に趣こうとする人	無自性，不生，不滅 本来寂静，自性涅槃 〔但し，よく区別されている〕	了　　義

そして，特にこの中の「教説の主な内容」に関して，瑜伽行派の立場からの次のような解釈が述べられているのである。つまり，第一転法輪に於ては自相によって成立する自性が諸法に有ることが一律に説かれており，第二転法輪に於てはそのような自性が諸法に無いことが一律に説かれており，又第三転法輪は有と無がよく区別されて説かれているというものである (LN. pha, 14a2-3)。特に第三転法輪の了義性は，三性（三無自性）という設定を通して諸法に於ける有と無の側面がよく区別されて説かれていることにあるというものである (LN. pha, 14b3-5)。

『善説心髄』に於ける一連の記述からすれば，第一転法輪には小乗の経典が，第二転法輪には大乗の『般若経』等の経典が，そして第三転法輪には大乗の『解深密経』等の経典が配当されていると考えられる。二諦説の立場から「勝義無自性」を説いていると考えられる第二転法輪の『般若経』等の諸経典は，三性，三無自性説を通して「勝義無自性」という究極的な教えを説いていないから，瑜伽行派にとっては言葉のままに捉えられない未了義経なのである (LN. pha, 40a6-b1)。しかし，『般若経』を主に依拠とする中観派に於ては，当然そのような見解が肯

われることはないのである。

中観派が教説の未了義と了義を唆別することに於て依拠とする聖教は，前述のように『無尽慧経』(AS. bu, 155b5-156a7, Taishō, vol. 13. p. 205, b10-24) である。その記述，更には『中観光明論』(MA. sa, 148b7) を踏まえた上でツォンカパは，中観派に於けるそれらの唆別の基準が以下の二点にあると述べている。その第一は，「説かれたままの意味が有るか無いか」(LN. pha, 43b5)，つまり「言葉のままに捉えられるに相応しいか否か」ということである。これは，瑜伽行派に於けるそれらの唆別の唯一の基準でもあり，又『中観光明論』に於ては，「〔その教説を証明する〕量を有する〔か否か〕」(MA. sa, 148b7)，と換言されるものなのである。そして，第二は，「勝義を主題としているか否か」(LN. pha, 43b5) ということなのである。たとえば，「種子より芽が生じる」という表現は言葉のままに捉えられるに相応しいが，勝義を主題としていないから未了義の教説となるのである (LN. pha, 43b5-6)。

中観派に於ては，そのような意味で『般若経』諸経典は総じて了義経と見做されるのであるが，中観自立派——特に寂護等の自立派と——中観帰謬派の間には，その見解に若干の差異が有るのである。

そこに於ては，中観派の二諦説設定に不可欠な「勝義として」等の限定句の有無に関して，『般若経』諸経典は二分されるのである。自立派はそれらの限定句が付加されている『十万頌般若』等を了義経とし，付加されていない『般若心経』等を未了義経とするのである (LN. pha, 59a4-b1, pha, 59b4-60a1)。一方，帰謬派は両者を共に了義経とするのである (LN. pha, 100a6-b3)。この限定句の有無は，前述の「言葉のままに捉えられるに相応しいか否か」に関わる議論であるが，そのような見解の相違は，それらの限定句が明確に付加されていない教説に，意味として (don gyis, LN. pha, 100b1) の限定句の付加を認めるか否かに基づくものと考えられるのである。

—〔略号〕—

AS-*Akṣamatisūtra*, Peking ed. No. 842, LN-*Legs bshad snying po*, bKra shis lhun po ed. vol. 21, MA-*Madhyamakâloka*, sDe dge ed. No. 3887. SN-*Saṁdhinirmocanasūtra*, ed. by E. Lamotte, Taishō—大正新修大蔵経。

（駒沢大学大学院）